棋士の情景

～勝負の厳かさは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段　島　朗

（第６話）

棋士の引き際

～順位戦に対する考察（下）

棋士が辛いのは、負けて収入が減ることもさることながら（年収不定ですから、大抵の大波には耐えられます）順位戦のクラスというステイタスが落ちていく、それが白日にさらされ、プライドが崩壊する面に耐えられるかどうかが、結構厳しいのかなと常々考えています。年齢を重ねれば成績下降は自然なことで、そのペースを緩やかにするのがその棋士の地力といえます。

誰でも一定の勝利を順位戦であげ続ければ65歳の定年を超えても現役を続けられる可能性もあり、ベストの選択になるのですが、自分の場合、現実をそんなに甘く想定する自信・無謀さは持ち合わせていません（苦笑）。深夜まで対局の体力的負担、毎月30歳も40歳も年齢が下の若者と対戦する（しかもだいたい厳しい結末）精神的苦痛に耐えられなくなった面も大きいのかも知れません。

また順位戦参加年齢に昔から全くこだわりがない気持ちも、順位戦から退く決断を後押ししました。

思えば17歳からの４年間は、上のクラスになかなか上がれず、棋士人生でいちばん絶望と焦燥を味わった時期でした。またA級は運にも恵まれ９期務めることができましたが、これまた毎年陥落の恐怖ばかりで、安寧の思い出はありません。ましてや、全体勝率が下がり徐々に地位が落ち始めてからは、憂鬱さが増すばかりでした。

毎年春の陽気の中、順位戦の日程表と相手が記された郵便が届くと、重しのある一年の始まりです。リーグ表の中で、自信のある対戦相手がいなくなった時、それは自分がカモ筋に入ったことを示します。長年その世界で限られたメンバーで戦っていれば、みな暗黙に自分の真の実力を自覚させられるというものです。

このように順位戦は私の中では生涯ほぼ苦悩の対象でしたが、思うのは毎月こうした「棋士の核」ともいうべき部分が制度化されているおかげで、最低限の秩序と規律が生活の中で保たれたことも、これまた確かな一面です。

仕事であり、好きで生涯をかけた対象であり……棋士がいつまで将棋を続けられるか、先のことは誰もわかりません。思い出されるのが、自分が若手時代に、兄弟子の中原誠十六世名人と同席させて頂き、アマチュアの方とお稽古将棋をする機会を得たときのことです。

年配の懇意な方が中原先生と対局を終え、お話しをされていました。そんな中「名人、棋士は仕事としてはどうですか？」と素朴なご質問を。少し考えて中原先生は答えられました。

「勝っている時はどんなに強く見える棋士でも、必ず最後は敗北していきます。それは誰も避けられないことです」と厳かな口調で語られたことは忘れられません。十五期名人を取られた、中原先生にしてこのお答え……普通の棋士であればいったい……棋士という仕事を改めてシビアに感じられた日でした。